ちょっとブレイクしませんか?

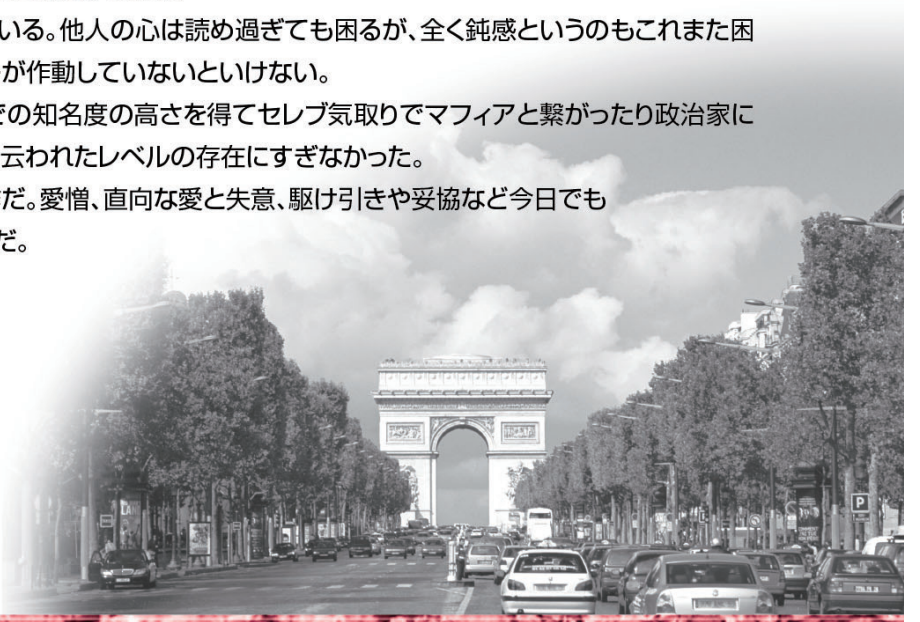
天井桟敷の人々 【1944年 仏蘭西】

第14回

イソップ寓話に「道化と田舎者」と題する小話がある。ある時、金持ちの貴族が劇場を開き、新しい出し物を考えた者には、多大な報酬を遣わすとのおふれを出した。そこへ、大変面白いと評判の道化がやって来て、今まで、一度も舞台に掛けられたことのない出し物があると言った。すると、この話は世間で持ちきりとなり、人々は大挙して劇場に詰めかけた。道化は、道具も助手も連れずに一人舞台に姿を現した。群衆は何が始まるのかと固唾を飲んで見守った。

一八四〇年代、ルイ・フィリップ治下のパリ繁華街を舞台に、とりどりの人間群が織りなす人生の色模様をバルザック的な壮麗さで描いたカルネ・プレヴェルの代表作。劇の中心をなすバティストとルメートルは共に実在の人物で、前者は本名シャルル、パントマイムのピエロ役の近代的創造者として知られている。
タンプル大通り、通称犯罪大通りで裸を売りものにしている女芸人ガランスはパントマイム役者バティストと知り合いになった。パティストは彼女を恋するようになった。無頼漢ラスネールや俳優ルメートルもガランスを恋していた。
パティストの出ている芝居小屋「フュナンビュール」座の座長の娘ナタリーはバティストを恋していた。ガランスにいい寄るにしてはバティストの愛はあまりに純粋であった。
ラスネールといざこざを起したガランスは「フュナンビュール」に出演するようになった。ガランスの美貌にモントレー伯が熱をあげた。5年後、バティストはナタリーと結婚、一子をもうけていた。ガランスは伯爵と結婚していた。人気俳優になったルメートルのはからいでバティストはガランスに劇場のバルコニーで会うことが出来た。一方、劇場で伯爵に侮辱されたラスネールは風呂屋に伯爵を襲って殺した。バティストはガランスと一夜を過ごした。翌朝、バティストの前に現れたナタリーと子供の姿を見たガランスは、別れる決心をした。カーニバルで雑踏する街を去るガランスを追ってバティストは彼女の名を呼び続けた。

言葉を発せずに自分の気持ちを他人に伝えるのは、ボディランゲージとかアイコンタクトとか今日云われている。バティストは悲しみや純粋な愛情をパントマイムで見事に表現している。
ところで、KY(空気が読めない)人が最近増えている。他人の心は読め過ぎても困るが、全く鈍感というのもこれまた困る。的確な状況判断には、言葉と感情のセンサーが作動していないといけない。
ところで芸人はいまでこそアブク銭とメディアでの知名度の高さを得てセレブ気取りでマフィアと繋がったり政治家になったりお粗末極まりないが、昔は河原乞食とも云われたレベルの存在にすぎなかった。
「天井桟敷の人々」は映画史上に燦然と輝く名作だ。愛憎、直向な愛と失意、駆け引きや妥協など今日でも通じる人の心を道化師を中心に描いているからだ。



精神科医・映画評論家
粥川(かゆかわ)　裕平(ゆうへい)
国立大学法人名古屋工業大学
大学院産業戦略工学専攻教授